

下級兵士がみた植民地戦争 —台湾における「生蕃討伐」と加藤洞源—

後藤乾一編・解題[†]

Colonial War in the Eyes of a Lower-ranking Soldier: “Pacification of Barbarians” in Taiwan and Kato Togen

Ken'ichi Goto

Japan obtained Taiwan as her first colony at the Shimonoseki Treaty(1895) after the Sino-Japanese War. But it took a long time to establish full-control over the land due to the furious resistances on the part of Taiwanese as well as other “aborigines” in mountain areas. The Japanese military and police forces in Taiwan conducted thorough suppression against these resistances. Especially, military suppression of the “aborigines” who were oppressed under the deployment of “5 year plan of acculturation and pacification of barbarians” (Riban-Seisaku, 1910-14) carried out by the 5th governor-general Sakuma Samata was widely known for its harshness.

Today, the Yasukuni shrine has a list of war-dead who lost their lives in the “incidents and wars” and were enshrined as “god” since the early Meiji period. According to this list, 1130 soldiers were dead in the “Taiwan Campaign” mainly under the Riban-Seisaku.

Regarding the previous studies on colonization in Taiwan, a number of excellent works have been done on and about this oppressive period, both in Taiwan and Japan. In reality, however, not accurate record has been left by Japanese soldiers who actually were involved in the Campaign. Considering this, the introduction of a personal memoir written by a lower-ranking army soldier Kato Togen (1891-1952), who later became a resident-priest at well-known Hoon-ji of Ayase in Kanagawa prefecture, has a rare and great value in order to understand actual situations of the Riban-Seisaku.

はじめに

日清戦争(1894~95)終結後の下関条約によって日本は清国から最初の海外植民地として台湾を獲得したものの、その「平定」において予期した以上の長期にわたる激しい抵抗に直面した。「領台」初期におけるその人的・物的被害の甚大さが、漢民族系、先住民系(当初日本側は蕃人、生蕃等と呼称、1994年以降の台湾では原住民が公式呼称)を問わず彼らの抵抗運動に対する峻烈な平定作戦の背景にあった。領台以降、後述の「理蕃政策」が完了したとされる1915年までの約20年間を台湾における植民地戦争(期)と位置づけることが一般的である¹。

従来、先住民に対する軍事的鎮圧の徹底性、暴虐性については(1930年の最大の抗日蜂起「霧社事

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授



写真1 青年僧時代の加藤洞源 (1891-1952)
(神奈川県綾瀬市 早川義行氏所蔵)

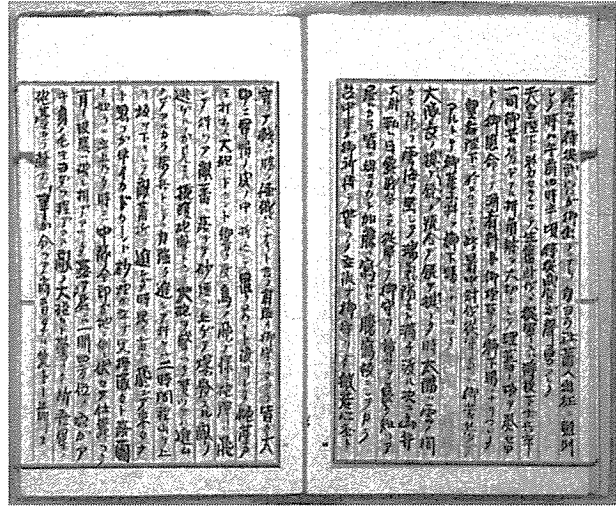


写真2 『廿七世生ひ立ちより』の一部

件」を含め)、日本側・台湾側の各種文献においてしばしば言及されてきた²。しかしながら、その「討伐作戦」に実際に従軍した日本の下級兵士による克明な記録は、管見の限り今までほとんど存在しなかった。そうした中で、本稿で紹介する加藤洞源の「廿七世生ひ立ちより」の中で綴られた従軍記録はきわめて衝撃的で、台湾における植民地化研究を深める上からも重要な意味を有するものと思われる。

この記録は本来『綾瀬市史3 資料編 近代』(1995年 神奈川県綾瀬市編)に収録された地方文書のひとつであり、同市史編纂委員会の中心メンバーである日本近代史家 大畑哲氏(元県立厚木高等学校教員)の丹念な調査の結果、地元報恩寺に保存されていたことが判明したものである。このように既刊ではあるものの、「市史」という流通範囲が極めて限定的な媒体に発表されたこともあり、この重要な記録が台湾植民地期研究の中で活用されることはなかった。大畑哲氏からの紹介で本記録を一読した筆者は、その史料価値の重要性に驚くとともに、しばしば“鳥肌が立つ”ほどの凄惨な「討伐」実態を垣間見、それを日本植民地期台湾なかんづく原住民社会(史)の研究に関心を有するより広範な人々に知っていただく必要があるとの判断から、あえてひとたび活字化された本史料をここに復刻させていただく次第である。

加藤洞源(1891~1952年)は法名で、本名は加藤新一、愛知県丹羽郡岩倉町(現岩倉市)曾野の出身である³。10歳で僧門に入り、翌年郷里の龍潭寺で得度する。1912年(大正元年)、徴兵で台湾歩兵第一連隊に現役兵として入隊し、佐久間左馬太総督(在任1906~15年、海軍大将)が「理蕃事業」の名のもとに遂行していた山地先住民=「生蕃」の「討伐作戦」に2年間にわたり従事する。その時の生々しい体験を赤裸々な筆致で綴った記録が本史料である。なお洞源は、1920(大正9)年、宗門の推挙で神奈

川島高座郡綾瀬村寺尾の曹洞宗の古刹報恩寺（開山、1602年）の第27世住職となった。そして洞源は、この記録を往時のメモや覚書きをもとに、死去する1年ほど前から書き綴り、その存在は没後長男である同寺28世加藤良興によって確認されたものである⁴。記録からも明らかであるが、「生蕃討伐」に従軍中の悲惨な体験から洞源は観音信仰に目覚め、住職就任後は報恩寺境内を観音信仰の霊場とする各種事業に精力的に取り組んだ。ここではその点については立ち入って触れないが、『綾瀬市史4 資料編現代』には、洞源記録の続編として「大東亜戦争」期の報恩寺には弾除け観音、お助け観音として出征兵士のため多数の関係家族等が訪れたこと、また敗戦後GHQの将校、兵士が洞源の法話に耳を傾けたことなどが記述されている⁵。

一 「生蕃」をみる視線

人種的、文明的に優位にあると自認する立場から、劣位にあるとみなした人々を「見物」という慣わしはいつごろから始まったのであろうか。こうした「劣等」人種、民族を展示の対象とする営為と19世紀後半のヨーロッパにおける社会進化論の隆盛とは、いうまでもなく不可分な関係にある。その嚆矢は、文化人類学者や歴史学者によってしばしば言及されるように、1889年5月フランス革命100周年記念行事としてパリで開かれた万国博覧会に求めることができる。エッフェル塔の完成や最新の産業文明の諸成果が訪れた3200万余の人々を驚嘆させた一方、その会場の一角にはフランスの諸植民地から連れてこられた生身の人間が入場者の好奇に満ちた視線にさらされた。

“花の都”パリでの「人間動物園」はその後のヨーロッパの万博の雛形となったが、そのモデルは20世紀初頭の日本にも移植されることとなった。1902年1月、日本は当時の最強国イギリスと日英同盟協約を締結し、世論はこれを「名実ともに世界強国の列に入りたるを思へば、或は恍然夢のごとき感なきに非ずといえども、夢か夢にあらず…」(『時事新報』1902年2月14日)と歓呼のうちに迎えた。そしてその翌年3月、大阪で開かれた第五回内国勲業博覧会の会場の一角に「学術人類館」なる見せ物小屋が設けられた。その趣旨は、「内地に近き異人種を集め」その風俗習慣を「学術的」に紹介するべく、「北海道アイヌ五名、台湾生蕃四名、琉球二名、朝鮮二名、印度三名、爪哇一名、バルガリー〔南インド・タミール系の少数民族と思われる—後藤〕一名、都合二十一名の男女」が、一等国の隊伍に加わった日本人の好奇の対象として展示された⁶。当時の『大阪朝日新聞』(1903年3月1日)は、こう寸描する。

「(彼らは)各其国の住所に模したる一定の区画内に団樂しつゝ、日常に起居動作を見すにあり亦場内別に舞台如きものを設け其処にて替はる々自国の歌舞音曲を演奏せしむる由にて観客入場の口は表にありて出口は裏にあり通券は普通十銭、特等三十銭にして特等には土人らの写真及び別席にて薄茶を呈すとの事」

この学術人類館からは、近隣アジアに向けられる近代日本の視線を特徴的に汲み取ることができるが、それは以下のように約言できよう。

第一は、「琉球処分」(1879年)あるいは「旧土人保護法」(1899年)により日本内地に統合したはずの琉球(沖縄)住民、アイヌを「異人種」と認識し、劣等視するまなざしである。このことは、逆に言えば、当時の日本人は自国を単一民族国家という虚構としてみるのではなく、異民族を包摂した「多民族

国家」]として暗黙裡に認識していたことを示唆するものでもあった。

第二は、台湾、朝鮮、中国とすでに日本が植民地化したり対外的膨張の対象とした地域—しかも朝鮮、中国の場合はかつての儒教文化圏の先進地域—が明白な優越感の対象となっていたことである。

第三は、こうした優劣関係が列強の植民地に組み込まれていたジャワ、インド等南方アジアにも同心円的に拡大されていたことである。単純化を恐れずにいえば40年後の「大東亜共栄圏」の秩序意識が、ここにはすでに明確に看取できる。

第四は、合計21名のうち半数近くに当たる9名がアイヌおよび台湾の先住民族によって占められていることである。勸農定住化の促進による撫育を目指した対アイヌ施策が植民地化以降の台湾の山地諸民族に踏襲されつつあった経緯を考慮する時、この両者が絶対人口数の少なさにもかかわらず過半近くを占めていたことは決して偶然ではないだろう。

そして第五は—この点は上記記事の中では明示的には指摘されていないが—アジア域内における差別の重層性ということである。その意味で真栄平房昭が紹介した『琉球新報』(1903年4月11日)の次の記事は、「弱者」間の断層の深さをみる上できわめて示唆的である。「台湾の生蕃・北海道のアイヌ等と共に本島人を撰みたるは、是れ我を生蕃アイヌ視したるものなり。我に対するの侮辱豈にこれより大なるものあらんや」⁷

このように概観してみると、20世紀初頭の帝国日本の確立期において内地(本土)→内国植民地→植民地、といわば「差別の移譲」の論理を見出すことが可能である。本稿が対象とする当時「生蕃」と呼称された台湾先住民族に対する「討伐」、「理蕃事業」は、その概念そのものに含まれる「文明論」的な価値観とともに、それを産んだ近代日本の「オリエンタリズム」的なアジア認識と不即不離の関係をもって展開されたものであった。

二 「理蕃事業」の展開

前述した内国勸業博覧会での「展示」が示すように、文明的に劣る存在として「生蕃」が日本社会に可視化されるようになった時期、現地台湾における日本側統治者は、どのような「生蕃」施策を構想し、準備していたのであろうか。

日清戦争終結直後の1895年10月31日、日本は日令26号「官有林野及樟脳製造取締規則」を発布するが、その第一条において「無主地=官有地」の原則が提示され、爾後先住民族の居住地域を「合法的」に収奪する法的根拠となった⁸。こうした新たな統治者による一方的な生活「圏」・生活「権」への浸潤が、先住民による抗日抵抗運動の激化の引き金となったことはいままでのまなかった。

「領台」初期から日本側当局を悩ませた先住民の武力抵抗に対し、第四代総督児玉源太郎(在任、1898~1906年、陸軍大将)は、その「対蕃方針」においてこう断じた。「蕃界ニ棲息スル蕃人ハ頑蠢馭シ難ク野生禽獸ニ齊シ…宜シク速ニ鋭意シテ前途ノ障碍ヲ絶滅セシムルコトヲ期スヘキナリ」⁹。このように領台初期から「野蛮」な先住民の抵抗に苦慮していた日本側であったが、当初はそれ以上に漢族系住民の執拗な抵抗が除去すべき主対象であった。日清戦争終結から1915年の「理蕃事業」終了までの20年間を植民地戦争(期)という概念で理解する大江志乃夫は、この期間を三期に区分し、漢族系住民のゲ

リラの抵抗が一段落ついた1902年から15年までを「山地住民の軍事的制圧」期と捉えている¹⁰。他方、「討伐」期の開始と終結をより長く1896～1920年の時間軸で捉える傅琪貽は、この時期官側統計による「蕃社討伐及警備線前進方面状況年代表」だけでも152回に達する征服戦争が展開されたと指摘する¹¹。

こうした一連の対先住民施策が、より具体的な形で集大成されたのが児玉源太郎の後任佐久間左馬太総督の下で1910（明治43）年から五年間にわたり実施された「五箇年計画理蕃事業」である。いうまでもなく加藤洞源の「討伐作戦」参加もこの時期のことである。「理蕃事業」に関してその中心的担い手であった総督府警務局の資料は、こう述べている¹²。

「(同事業は) 彼等の蒙を啓き蕃地の利源を開発し、一視同仁の聖徳に浴せしむることを目的とするものなれば、誠意帰服する者は容れて化育し、凶悪固陋度し難い者に対しては飽く迄威力を示して帰服を促すにある。計画愈々成り歩武を進むるや、先ず獐猛を以て誇る北方部族に大いに強圧を加へ、遂に彼等の有する銃器弾薬の大部分を押収し、大正三年八月略一段落を遂げ、同十月更に余力を以て南方部族の処置に着手し、多数の銃器弾薬を押収し、大正四年一月に至って投誠帰順をせしむることを得た。茲に於て多大の国帑と尊ぶべき幾多の犠牲を払った五箇年計画理蕃事業も全く完成するに至った。」

また研究者による同事業の歴史的位位置づけについては、近藤正己による簡にして要を得た次のような指摘がある¹³。

「総督佐久間左馬太が行った1910年から五カ年にわたる「北蕃」の「討伐」とその直後の「理蕃事業ノ成功」宣言と「撫綏」方針の表明は、まさしく「威シテ而ル後撫スル」方針を踏襲したものであった。

佐久間の「討伐」は一般に次のような順序で実施された。まず官庁の命令に対する絶対遵守、隘勇線という防御ライン内への進入禁止などを内容とした帰順勧告が出される。帰順勧告に従わない場合には隘勇線で塩や銃の流入を防ぎながら、この隘勇線を徐々に前進させ、再び山嶺を開いて、道路を設けて数十間の草木を刈って射界とし、要所には火砲を配置した堡壘を築造していった。そして近代的兵器を装備した軍隊や警察隊を投入し、先住民がそれに抗しきれず帰順すると、抵抗手段であった銃器が押収された。一九一五年の押収量は一万四〇〇〇丁にもものぼっているが、銃器は狩猟生活に不可欠な道具だったのでその押収は困難を極めた。しかも、佐久間の「討伐」で台湾全土の「征服」が完了したのではなかった。「理蕃史上最後の未帰順蕃」として有名な高雄州旗山郡のブヌン旗タマホ社の二〇〇名余りが頭目ラホアレを先頭に下山し州庁玄関で帰順式を挙げたのは、一九三三年四月二二日だった〔霧社事件は1930年10月〕。佐久間の「討伐」から約二〇年かかったのである。」

なお「生蕃討伐作戦」を考える場合、沖縄との関わりも無視できない。沖縄と台湾との地理的、風土的近縁性に起因し、「領台」直後から少なからぬ数の沖縄県人がさまざまな形で渡台した。内地との関係では被害者である沖縄県人が植民地台湾との関係ではしばしば加害者となった両面性に着目する沖縄在住の史家、又吉盛清は沖縄側史料を実証的に跡付け、沖縄県人の「理蕃事業」への関わりの実態を明らかにしている。その一例として又吉は、「領台」直後の1896年3月、警察官として渡台した仲本政叙の

足跡を追っている¹⁴。「理蕃事業」実施の前年警部に昇格した仲本は、1912年（明治45）年4月、南投庁下の埔里社から発進した「大討伐隊」（石橋南投庁長を前進隊長に一千余名からなる）の幹部の一人として百名の部下を引率行軍中、「生蕃」との銃撃戦で35名の隊員とともに戦死する。

『台湾大年表』をひもとくと同年5月3日の項に「前進隊副長戦死 白狗前進隊副長官長倉警部及び隊長仲本警部戦死す」との記事がみられる。生前の仲本は、「生蕃の巢窟」視された南投庁の集々支庁地区で「討伐隊」を組織し「抜群の功績」でたびたび「勲章」を授けられていた。『琉球新報』（1912年5月18日）は、仲本政叙のようなこうした沖縄県人について「（県人巡查で）土匪、又は蕃人討伐に従事し勲勞あるものに対し、叙勲及賜金の御沙汰あり」と報じ、15名の関係者の氏名を公表した。植民地台湾が東南アジアあるいは南洋群島への「南進」の拠点とされる一方、「内国植民地」沖縄は、台湾およびそれ以南への「南進」の「前進基地」として位置づける見方が19世紀末以降根強くみられたが、植民地において一定の地位と「名誉」を手にした仲本警部の生涯は、内地と外地の間に置かれた沖縄人の複雑な立場とそれ故に派生する屈折にみちた台湾との関わりの象徴といえるのだろう。

台湾歩兵第一連隊の兵士として加藤洞源が「生蕃討伐」に従軍したのは、日本側にも少なからぬ死傷者が続出していた1912（大正元）年からの約2年であった。「理蕃事業」実施の背景および加藤の従軍時の状況を見る一助として、『台湾大年表』に依りつつ「理蕃事業」五箇年計画が開始された1910（明治43）年以降、約5年間の「理蕃」をめぐる全事項を記しておく¹⁵。「武」と「撫」を織り交ぜた施策が試みられている実情がうかがわれるが、なによりも先住民による熾烈な抵抗が、日本側の死傷者数の多さからも明白に浮かび上がってくる。また日本側が1914年8月と9月、各地で「凱旋祝賀会」を盛会裡に開いた直後に「兇蕃」の襲撃により多数の死傷者が出たとの記述も印象的である¹⁶。

「理蕃」関係略年譜

明治43(1910)年

1月

総督蕃人引見 佐久間総督は台北観光中のガオガン蕃人を官邸に引見す（8日）

蕃地部設置 愛国婦人会台湾支部に蕃地部を新設し蕃地の開拓並に蕃産物を経営す（16日）

兇蕃駐在所襲撃 ガオガン蕃人宜蘭叭哩沙支庁九芎湖駐在所を襲撃し巡查堀川忠五郎外十一名の死傷者を出す（29日）

2月

総督隘勇線巡視 佐久間総督は北部隘勇線巡視を終り帰府す（20日）

5月

宜蘭隘勇線進隊 行動を開始す（21日）

6月

宜蘭討蕃隊苦戦 宜蘭方面討蕃隊は9日以来激戦数十回ボンボン山の夜襲激烈を極め川和田大尉以下70余名の死傷者を出す（21日）

討蕃隊員慰問金品を募集す

宜蘭隘勇線進隊 行動開始以来死傷者 80 名に達す

7 月

討蕃検閲使 東郷大将一行軍艦満州号に搭乗し馬公に著す (3 日)

討蕃慰問演芸会 3 新聞社主催討蕃隊慰問演芸会を本日より 2 日間芳乃亭に於て開催す (6 日)

台中討蕃慰問演芸会 3 新聞社主催討蕃隊慰問演芸会を台中座に於て本日より 2 日間開催す (25 日)

11 月

討蕃凱旋慰労会 台北官民有志主催にて討蕃凱旋慰問会を榮座に於て開催す (17 日)

12 月

南投霧社蕃 討伐開始さる (15 日)

明治 44 (1911) 年

4 月

北勢蕃 討伐開始さる (4 日)

蕃匪賊討功労者 明治 28 年勅令第 115 号を準用し戦時同様に取扱はるゝ事となる (5 日)

5 月

北勢蕃討伐隊苦戦 地元警部補外巡查 8 名戦死し其他負傷者を出す (8 日)

6 月

蕃人引見 佐久間総督官邸に蕃人を引見す (12 日)

兇蕃襲来 南投庁白狗社方面兇蕃襲来し巡查以下 10 名を殺害す (14 日)

阿緱蕃兇行 阿里港支庁長警部慶邦武外 2 名兇蕃の爲め殺害さる (24 日)

北勢蕃討伐隊 解隊す (27 日)

7 月

蕃匪討伐功労者 大鳥久満次以下 1094 名に対し夫々叙勲の御沙汰あり (10 日)

台東平地蕃 成広澳支庁を襲撃す (26 日)

8 月

新竹前進隊 行動を開始す (2 日)

総督蕃界視察 佐久間総督は本日より蕃界視察の途に就かる (3 日)

新竹前進隊死傷続出 2 日行動開始以来死傷続出し太田警部補以下戦死 21 名生死不明 5 名 (8 日)

10 月

台中隘勇線 前進行動を開始す (5 日)

長官隘勇線視察 内田民政長官は新竹隘勇線前進状況を視察して帰府す (12 日)

11 月

台中隘勇線 前進隊解隊す (2 日)

討蕃傷病棟舎建設 台北医院構内に建設中の討蕃傷病棟舎落成す (6 日)

討伐殉難者追悼会 台中庁にては隘勇線前進殉難者の爲め東勢角に於て追悼会を執行す (25 日)

明治 45 (1912) 年

1 月

北勢蕃討伐隊被害 台中北勢蕃討伐隊戦死 13 名及び数名の負傷者を出す (23 日)

2 月

新竹前進隊副隊長 宇野英種負傷す (4 日)

討蕃隊死傷者 去月 22 日前進行動開始以来死傷者 173 名を出す (7 日)

久保山占領 新竹北勢蕃討伐隊は多大の犠牲を払ひ遂に久保山を占領す (12 日)

総督蕃人引見 佐久間総督は来北観光中の南澳蕃を官邸に引見す (15 日)

討蕃隊慰問演芸会 朝日座に於て開催す (18 日)

総督負傷者慰問 佐久間総督台北医院に討蕃負傷者を慰問す (23 日)

宜蘭南投隊解隊 台中討蕃隊に属する宜蘭岡本隊及南投竹中隊は東勢角に於て解隊式を举行 (24 日)

総督討蕃状況視察 佐久間総督は北勢蕃討伐状況観察帰府す (29 日)

3 月

台中隘勇前進隊 台中公園にて解隊式を举行 (2 日)

台中隘勇前進隊戦死者 招魂際を台中公園に於て執行さる (23 日)

4 月

南投庁白狗方面前進隊 行動を開始す (26 日)

5 月

元帥蕃人引見 山縣, 大山, 奥三元帥東京観光中の蕃人を引見さる (3 日)

前進隊副長戦死 白狗前進隊副長官長倉警部及び隊長仲本警部戦死す (3 日)

6 月

ゲウクツ蕃社 暇帰順式を举行す (22 日)

7 月

蕃界戦病死者法要 台北本派本願寺別院に於て蕃界に於る戦死病没者追悼法要を執行す (10 日)

宜蘭蕃害 バロン山砲台詰巡查以下 7 名の死傷者を出す (12 日)

天皇崩御 午前零時四三分心臓麻痺にて崩御遊ばされし旨発表さる (30 日)

大正元年

9 月

兇蕃李峽山来襲 李峽山方面兇蕃来襲し 9 日間交戦渡辺隊長以下負傷者多数を出す (19 日)

10 月

新竹討蕃隊編成 家永新竹庁長前進隊長となり各部署を定め前進行動を開始す (3 日)

佐久間総督 蕃地巡視を終り帰府す (12 日)

討蕃慰問演芸会 栄座に於て開催す (23 日)

12 月

前進隊殉職者追悼会 李峽山隘勇前進隊殉職者福屋警部以下 229 名の追悼会を本派本願寺台北別院に

於て執行さる（3日）

大正2（1913）年

1月

新竹殉難者招魂祭 李嶼山方面隘勇線前進に際し殉難せる野田警部以下200余名の招魂祭を新竹公学校に於て執行さる（11日）

蕃人観光 宜蘭庁蕃人44名台北観光す（15日）

佐久間総督 来北中の観光蕃人を引見す（22日）

2月

総督蕃人引見 佐久間総督は台北偕行社に於て蕃人を引見さる（22日）

3月

呉鳳廟祭典 呉鳳廟新築工事落成につき祭典を執行し佐久間総督臨場さる（19日）

探検隊遭難 合歓山方面探検隊は風雪寒気の為め隘勇人夫凍死及行衛不明者約100名を出す（21日）

兇蕃脳瘰 襲来 台北庁新店支庁下蕃人脳瘰 空白（不明）襲撃し内地人本島人7名を滅首す（31日）

新蕃社発見 花蓮港庁璞石閣支庁管内に於て新蕃社5社を発見す

5月

桃園殉難者招魂祭 討蕃隊戦死者福原警部以下102名の招魂祭を桃園に於て執行さる（8日）

義肢御下賜 討伐隊隘勇人夫に義肢御下賜の旨を達せらる

6月

蕃社大討伐開始 新竹桃園庁下に於ける蕃社の大討伐開始さる（25日）

軍隊出動 新竹桃園蕃界へ軍隊出動す（26日）

7月

軍隊出動 陸軍各部隊宜蘭方面へ出動す（1日）

佐久間総督 李嶼山討伐隊司令部に進発（6日）

討伐隊総指揮官 内田民政長官討伐隊総指揮官として李嶼山司令部へ出張す（18日）

8月

西侍従武官 討伐隊状況視察並慰問として来北李嶼山討伐司令部に向はる（12日）

兇蕃汽船襲撃 ゴーコツ社蕃庁4名竹筏にて石油発動機船を襲撃し船員を滅首す（12日）

内田総指揮官 李嶼山司令部より帰府す（13日）

台北討伐隊後援演芸会 本日より3日間栄座に於て討伐隊後援演芸会を開催す（17日）

台北官民討伐隊慰問 市来警務課長松村公会副長外2名討伐隊慰問の為め李嶼山に向ふ（24日）

討伐隊慰問 各地方代表者討伐隊を慰問し且つ各地に於て後援演芸会を開催す

9月

討伐軍隊 本日より5日に亙り凱旋帰營す（3日）

佐久間総督 凱旋歓迎頗る盛んなり（5日）

討蕃殉難者祭典 台北古亭庄鍊兵場に於て討蕃殉難者 98 名の招魂祭執行さる (15 日)

凱旋祝賀会 台北苗圃に於て討伐隊凱旋祝賀会開催さる各地方相前後して同様祝賀会開催す (16 日)

探検隊出発 合歡山及び能高山方面探検隊として佐久間総督以下軍旅を整へて出発す (25 日)

10 月

探検隊帰還 佐久間総督の率いる合歡山及び能高山方面の探検隊は目的を達して帰還す (3 日)

大正 3 (1914) 年

1 月

総督蕃人引見 佐久間総督は台北偕行社に於て太魯閣蕃人百余名を引見す (23 日)

2 月

駐屯兵殺害 宜蘭蕃地に駐屯せる金山伍長外 4 名兇蕃の狙撃を受け 3 名即死 2 名重傷を負ふ (6 日)

4 月

蕃人公学校規則 発布さる (18 日)

5 月

太魯蕃討伐警察隊部署 指揮官内田民政長官, 副指揮官龜山啓志総長, 討伐隊長永田, 松山両警視以下夫々任命さる (12 日)

総督入蕃 佐久間総督は太魯閣蕃討伐軍司令官として蕃地へ出発す (14 日)

新竹シャカロー蕃 帰順式挙行さる (14 日)

太魯閣蕃討伐 行動開始す (17 日)

龜山討伐副司令官 龜山警視総長討伐警察隊副指揮官として花蓮港へ出発す (22 日)

6 月

討伐隊後援演芸会 台北在郷軍人会主催にて本日より三日間栄座にて開催さる (5 日)

若見侍従武官 討伐隊慰問として來台視察 (10 日)

台南討伐後援演芸会 南座に於て開催す (20 日)

討伐戦死者祭典 大高中尉以下 10 名の遺骨到着歩兵第一連隊に於て祭典を執行す (24 日)

嘉義討伐慰問演芸会 嘉義座にて本日より 2 日間開催さる (24 日)

愛国婦人討伐後援演芸会 朝日座に開催 (24 日)

総督負傷 佐久間討伐軍司令官戦線視察中断崖より墜落負傷さる (26 日)

7 月

内田民政長官 討伐軍司令部へ向け出発す (10 日)

8 月

佐久間軍司令官 凱旋す歓迎盛なり (19 日)

討伐警察隊 花蓮港花岡山に於て太魯閣蕃討伐警察隊解隊式挙行さる (23 日)

警察隊総司令部 凱旋帰還す (24 日)

蕃地平定奉告祭 台湾神社に於て執行す (28 日)

9月

討伐隊凱旋祝賀会 台北苗圃に於て官民合同大祝賀会を開催し提灯行列等を催し盛況を極む（5日）

嘉義討伐隊歓迎会 嘉義座に於て開催さる（8日）

台南招魂祭 台南公園に於て討蕃殉難者招魂祭並に凱旋歓迎会を開催す余興等頗る盛なり（13日）

台中討蕃隊戦死者招魂祭 公園にて執行（19日）

10月

兇蕃駐在所襲撃 阿緱庁下兇蕃リキリキ社駐在所を襲撃し警部補以下22名を殺害す（9日）

支庁長殺害 兇蕃大挙枋山支庁を襲撃し尚ほ阿里港支庁長脇田警部以下10名を殺害す（11日）

通事呉鳳建碑式 嘉義社口庄に於て挙行（24日）

蕃害 リキリキ社蕃害後の死傷者74名に達す

大正4(1915)年

1月

蕃匪討伐功勞者 受勲の件公布さる（17日）

南蕃搜索隊 解隊さる（20日）

2月

太魯閣蕃総頭目 ハロクナワイ病没す（21日）

4月

北勢蕃 帰順式を挙行す（23日）

5月

佐久間前総督送別会 新公園に於て開催（10日）

6月

始政20年記念日 台北に於て記念植樹式、全島武術大会、物産展覧会、教育品、専売品及び通信の各展覧会開催さる（17日）

安東総督 偕行社に於て蕃人を引見す（22日）

8月

陸軍大将佐久間左馬太 逝去、閱歴性行は普く世の知る所、明治39年4月台湾総督に任ぜられ五箇年計画を以て太魯閣蕃を討伐し理蕃事業を大成治台10年間の政績顕著なり（5日）

〔史料・自伝草稿〕

〔大正2年(1913)年〕台湾先住民族「討伐記」(抄)

「廿七世生ひ立ちより」

(前略)

徴兵検査ニ合格シテ台湾歩兵第一聯隊ニ入宮シタガ、下ノ関ニ居ル時煙草ヲ吞マネハナラヌカラ稽古セヨト言ハレ、朝日ト敷島トバツトヲ初メテ買ヒ、一本ヅ、吞ンデ良イノヲ吸フト良イト教ヘラレ

タマ、吸^(ツ)ンテ見タガ、ドレモ〜ホロ苦ク、ムセテ、其上舌ガ痛イ。二本ツ、吸ツタガ、ドレモ良クナイ。頭ガクラ眼マイガシテ、遂々眠テ仕舞フ。其ノ翌日船ニ乗込^(掛)ンタカラ耐ラナイ。機関ノ音デ頑ガ痛クナリ、三日目玄海灘ニカゝツテカラハ鯨ノ遠ク塩吹ク偉觀ヲ眺メ、飛魚ノスーツ〜ト飛ビ廻ルヲ見、波ノ間カラピチット踊り上ツタ魚ガ鳥ノ如ク自由自在ニ飛ビ廻ルノヲ珍ラシク眺メテ居タガ、音ニ聞エタ玄海灘ハ浪高ク、船ニ酔ツテ夢中デアツタ。六日目ニ基隆港ニ着、七日目ニ上陸シタガ、海ニ十五、六頭ノ龍ガ首ヲ揃エ陸ヲ目掛ケテ来ルノヲ発見シテ、アレ〜恐ロシイ龍ガ角ヲ立テ、来ルト大騒ギニナツタ時ニ将校ガ来テ、将皆、アレハ龍デハナイ、水牛ト言フテ台湾ニハ沢山居ル牛ダ。陸ニ棲ンダリ、水ニ這入ツタリスルト説明セラレテモ、首ダケ出テ角ガアルカラ龍ダロウト半信半疑デアツタ。日本晴レノ青天井ダニ、皆早く汽車ニ乗ラヌト雨ニ濡レルゾト言ハレテモ、此天氣デ降ル者カト言フテ居ルマニ、ザアート音ヲ立テ、夕立ノ様ニ降ツテ来タ。基隆ハ毎日午後ニハ降ルノデ、二、三日降ラナイ時ハ大變ノ心配ダトノ事、雨ノ基隆天氣ガ続キ、サテハ荒^(嵐)シカト気がモメル。

台中第三大隊第十一中隊ニ入営シタ。中隊長山井大尉ハ仏教信者デ、夜ノ講話スル時ニハ新兵ノ私ニ五分演説ヲサセテ下サレタ。山井上等兵候補者ニナルカ、私ノ所ニ来テ遊ブカ、ドチラガ良イ、安齋院ニハ武内聯隊長ガ一家揃ツテ来ラレ、私モ度々行ツテ御話シテ帰り、其他大島中佐ヲ初メ将校ノ方ガ度々来山サレル為、上等兵位最上級デハナイ、只国家ノ干城トシテ上下ハナイカラ、中隊長殿ノ從卒ニシテ下サイト、從卒シテ敬愛サレ、生蕃討伐ニモ從軍シタガ、生蕃討伐中、山ヲ下ル時私ハコロ〜丸イカラ、良ク落ちテ笑ハレタ者デアル。

大正二年八月七日、サラマオ砲台（千八百尺ノ高地）ニ居リマス侍從武官ガ御出デニナリ、カヨウ社蕃人出征ニ整列シタ時ハ午前三時半頃、侍從武官ガ声勇マシク、天皇陛下ニ於カセラレマシテハ、生蕃討伐ニ從軍スル将校下士兵卒一同御苦勞デアル、折角躰ヲ大切ニシテ理蕃ノ功ヲ奏セヨトノ御恩命ニテ、酒肴料ト御煙草ヲ御下賜ニナリマシタ。皇后陛下ニ於カセラレテハ、此ノ暑中討伐從軍者ニハ御苦勞デアルトテ、御菓子料ヲ御下賜ニナリマシタ。

大隊長ノ堤^{サ、ゲーツツ}ケ銃^{ササ}ノ号令デ銃ヲ堤ゲタ時、太陽ハ雲ノ間カラ昇リ雲海ヲ照シテ瑞氣陽々ト満チ渡ル。次ニ山井大尉私ハ日露戦争ニモ從軍シテ、御守リノ尊サヲ良ク知ツテ居ルカラ皆ニ与エヨウト、加藤ニ写サセテ謄写版ニシテカラ台中寺デ御祈祷シテ貰ツタ立派ナ御守リダ、般若心經ト言フテ、戦ニハ勝ツ怪俄ハシナイト言フ有難イ御守リダカラ、皆ガ大切ニ軍帽ノ皮ノ中ニ折込^(サ)ンデ置クヨウニ渡サレタ。砲台カラ打出ス大砲ハドカント響ク度、島ノ飛ブ様ニ砲弾ハ飛ンデ行ツテ、敵蕃ニ落ちテ砂煙ヲ上ゲテ爆発スル。敵ノ逃ゲルノガ見エル。掩護砲撃ト云テ、大砲ヲ撃ツテ貰ツテハ進ムノデアルカラ、歩兵トシテハ力強く進ンデ行ケル。二時間程山ヲ上り坂ヲ下リシテ敵蕃近ク進ンダ時、黒イ者ガ飛ンデ来タナト思フガ早イカ、ドカーント砂煙ガ立ち、黒煙濛々ト落雷ノ如クニ立上^(ツ)ルタ時ニハ、中隊全部ガ地ニ倒レ伏セテ仕舞ツタ。耳ノ鼓膜ハ破レ相デアツタ。落ちタ処ニハ一問四方位ノ穴ガアキ、身ノ毛モヨダツ程デアル。敵ノ大砲カト驚イタ所、吾軍ノ砲台カラ撃出シタ事ガ分ツテ尚青クナル。

先ト一前^(頭)エ、グズ〜シテ居ルト亦撃タレルゾト云中隊長ノ言葉ニ、味方ノ大砲ニ撃タレテハ全鷄勲章ニモナラヌ心細イ話ダト、喇叭手ガ砲台ニ向ツテ撃方止メノ吹奏スルヤラゴツタ返シテ前進スル。敵蕃ハ強剛ニ敵対スルト覚悟シテ居タノガ、案ニ相違シテ白旗ヲ振り〜降参ヲ申込^(ツ)ンデ来タ。偽降参カモ知レヌカラ充分ニ警戒シツ、蕃社ニ這入ル。蕃屋ハ三問四方位、深サ一問程堀下ゲ堀立式ニ出来、屋根ハ

大地ヨリ二尺程ノ高サニアル。窓ハ五寸程ニテ内側ハ広く、銃口ヲ窓口ニ当テ、撃ツニ便利ナ様ニ出来テ居ル。生蕃ハ子ノ生レルヤ、日本ノ御宮参リ様ニ高イ山ニ登リ平野ヲ指サシテ、蕃彼ノ広イ野ニハ御爺サン御婆サンガ居タノヲ、支那人ガ征メテ来テ御爺サン御婆サンヲ殺シ、彼ノ土地ヲ奪ツテ仕舞ツタカラ、彼ノ首ヲ取り御先祖ニ御供セヨト赤兎ニ言ツテ聞カセルトノ事、大男ニナルト団体ヲ組ンデ首取祭ニ出掛ケル。

其ノ時ニハ手ニ鉄鉋ヲ持チ、或ハ弓矢槍ヲ提ゲ、網ノ中ニ真鍮ノホーロク(鍋)ヲ入レテ背中ニオヒ、人間ノ首ヲ取ルヤ其ノ鍋ニ入レテ持帰り、栗酒ノ上ニ二本ノ棒ヲ渡シ、其ノ上ニ首ヲ乗セ、首ヨリ落ちル血ノ交ツタ酒ヲ呑ムノガ最上ノ祭ヒデアリ、酔フトウイ〜〜ト生蕃踊リヲスルトノ事デアル。今カヨウ社ノ蕃人ハ降参シテ銃五十丁、槍七十本、弓二十五張ヲ出シタガ、マダ沢山有ル筈デアルガ、何か〜出サナイ。カヨウ社ハ周囲一面石板石ノ山デ、石ヲ拔出シハメ込ム事が自由ニ出来ルカラ隠サレテハモウ分ラナイ。討伐本部ヨリ偽降参ダカラ捕縛シテ仕舞ヘト云命令ノ下ツタ十七日、帰順式ト云フテ降参シタ祝イニ酒ヤ御飯ヲ饗応シテヤルニ来イ、女モ子供モ皆来イト布令ヲ出シ、大釜デ飯ヲドン〜タキ、筵四枚ノ上ニ山ノ如ク積ミ、チャンチュウ(支那酒)石油カンノ鏡ヲ抜イテ七斗並べ、塩魚ノ開キヲ五、六百モ並へ、サア腹^(一杯)呑メ喰ベヨト言フノデスカラ、生蕃喜ンダノ喜バヌノデハナイ。生蕃ハ栗^(栗)ト薩摩芋ガ定食、米ハ不老不死ノ妙薬ダト信ジテ居ル。塩ハ一代ニ一度カ二度シカ喰ベラレナイ尊イ者ダト思ツテ居ル。栗酒^(栗)シカナイ所ヘ支那酒ガ呑メルカラ、丸デ極楽ノ夢ヲ見タ様ナ顔付デ眺メテ居ル。二、三百人位イト思イノ外、彼処カラモ此処カラモゾロ〜蟻ノ這出ス如ク、山ノ上カラモ谷ノ間カラ集ツテ来テ、四、五百集ツタ時、サア喰ヘト、通訳ガ若シマスト、イショ〜ト雀躍シ乍ラ、女ハ飯ヲ喰べ、子供ニハパンヲ十枚ヅ、貰ツテ喜ブ様ハ、全^(丸)デ餓鬼ガ齋^{トキ}ニ付イタ様デアル。

男モ女モ入墨ヲシテ居ル。口カラ耳ニカケテ入墨シテ居ルカラ、口ガ耳迄裂ケテ居ル鬼ノ様ニ見エル。躰モ六尺位ノ男ハ沢山居ル。鬼ガ白髯ヲ生カシテ居ルト兵士ガ大騒シテ、傍ニヨツテ見ルト髯デナクツテ、顔中飯ダラケニシテパクツイテ居ル。酒ニ酔ツテ彼処此処ニ、ウイ〜ト腰ニ手ヲ当テ生蕃踊リデ踊リ出シタ。日ハ西山ニ沈ミ、人ノ顔モハツキリ分ラズ、誰ゾ彼ゾト云夕日暮、散丘ハ壕ニアル軍隊ハ嚴重ニ武装シ静カニ散兵壕ヲ出デ、生蕃ヲグルツト二重ニ取巻イタ時、十五、六軒ノ蕃社ニ火ヲ附ケ、パシパシパシ〜ト燃上ルヤ、小松大隊長ハ附ケ剣ト云号令ノ元ニ兵隊ハ悉ク剣突鉄鉋ニ致シマスト、大隊長ハ大音声ニ、今ヨリ生蕃ヲ逮捕セヨ、抵抗スル者、逃グル者ハ突キ殺シテ仕舞ヘ、斬リ殺シテ仕舞エトノ命令ガ終ルヤ、通訳ハ生蕃ニ、今カラ御前等ヲ縛ルカラ動クナ、抵抗スル者、逃ル者ハ殺サレルゾト申シマスト、生蕃ハ大人モ子供モ蕃刀ヲ引抜イテ、狼ノ如キ威^(勢)イデ、ワアト言フテ斬付ケル。軍隊ハ剣先ヲ揃エテ、ワア〜ト「トキ」ノ声ヲ上ゲテ突倒ス。

生蕃ノ中ニハ燄々ト燃上ル屋根ノ上ニ飛上リ、火ノ中ヲ厭ハズ逃出ス者モアル。五、六人一所ニ蕃刀ヲ振り、カコミヲ破ツテ逃出ス。生蕃ノ通路ハ、崖ノ横ニ有ル。崖ノ道ヲ切り落シ、道ヲ伝ツテ逃ゲル生蕃ガ必ズ落ちル様ニシテ、下ニハ二、三十人兵ガ剣突キ鉄鉋デ剣ノ山ヲ造ツテ待ツテ居ル。ソレトハ知ラヌ生蕃ハ、火ノ中ヲ免レカコミヲ破ツテ、脱兎ノ如ク地ヲ飛ブ様ニ走ツテ来テ、威イデアツト言フガ最后ニ落ちルヤ、待受ケタル兵士ハエツト一整ニ突キ上ゲル。一人ノ生蕃ニ七、八本モ剣ガ通り、蜂ノ巣ノ如クナツテ死ヌ。兵士ハ返リ血デ顔カラ服迄血ダラケニナル。阿修羅ノ如ク荒レ廻ル生蕃ニ耐リ兼ネテ、兵士ガ引金ヲ引イテ銃殺スル。パアーン、パアーン、〜。大隊長アブナイ撃ツテハナラヌト

言ハレタ時、生蕃ノ大将^(ドモク)ガ「皆、静マレ、～、～」ト言フト、三百名程ノ生蕃ガ暴風ノ静マル如クピタツト蕃刀ヲ鞘ニ納メテ座ツテ仕舞フ。嗚呼、頭目ノ權威ハ偉大デアルト感ジタ。

軍隊ハ全部ヲ捕縛シ、逃ゲタル敵ガ加勢ヲ頼ンデ夜襲スル防戦ノ準備ト生蕃ノ監視ニ不眠不休デア
ル。大隊長ハ頭目ニ、御前達、鉄鉦ヲ隠シ弓槍ヲ出サヌカラ捕縛シタノダ、鉄鉦ヲ出セバ助ケテヤルト
命ジマスト、鉄鉦ヲ持ツテ来マス、～、ト言フテ百名近クモ逃ゲテ仕舞フ。頭目ヲ呼出シ、皆逃ゲテ帰
ラヌデハナイアカ、頭私ガキツト皆ヲ連れ、全部ノ鉄鉦ヲ以テ来マスカラ、私ヲヤツテ下サイ。大隊長
ヨシ、今晚迄ニ帰ツテ来イ、万一帰ラヌト、残ツタ者全部ヲ殺シテ仕舞フゾ。頭ハイ、承知シマシタ、
ト立ツテ行ク。頭目百七、八十名ノ生蕃ハ、頭目キツテ帰ツテ来テクレヨ、私等ヲ殺スヨウナ事ハシテ
クレナヨ、頭目～～、ト哀願スル有様ニハ皆貫涙ニクレタ。熱イ^(焼)～炎ケ付ク様ナ日モ次第ニ西ニ傾キ、
日グラシ蟬ノ声ノ鳴立ツ頃ニハ、残サレタ生蕃ハ騒ギ初メタ。縛ラレタ躰ヲパタ～サセテ、頭目ワ来ナ
イカ、～、ト口々ニ叫ビ出シタ。日暮蟬ヨリ果敢ナイ命ト悟ツタラシイ。生蕃ノ五、六名ハ、縛ラレタ
マ、護衛ノ兵隊ヲ突キ側シ、数百丈ノ断崖ニ飛ビ込ム。落ち行ク生蕃ヲ上カラ一声射撃スルガ、弾ハ当
り相ニモナイ。日暮蟬ノ声ハ止ミ、日ハ暮レタガ頭目ハ帰ラナイ。

大正二年八月廿日午後八時、山ノ上下ニアル百軒余リノ生蕃ノ家、^(粟)栗倉等ニ火ヲ付ケマシタカラ、黒
煙濛々ト燃エ上ル。大隊長ハ大音ニ、頭目ハ帰ラヌ、約束通り実行スル、ト宣言サレタカラフ女ハグア
ツト泣出ス。捕縛スル時焼イター一番大キイ家ハ、四間程ノ大キサ、一丈位ノ深ノ穴トナツテ居ル。其ノ
穴ニ生蕃ヲ斬ツテ投込ム。穴ノ端ニ引出シタ生蕃ニ穴ノ中ヲ覗カセ、軍刀ヲ以テスパツト斬下シマスト、
同時ニ血ガ^(噴)憤水ノ如クピユウト一間以上モ高く血柱立テ、飛ビ上リ、首ガ落ちルト清水ノ湧出ス如ク、
血ガドクン～ト吹き出スノヲ穴ノ中ニ突落ス。生蕃ハ男モ髪ヲ御下ゲニシテ居ル。火ハ次第ニ燃上リ、
パン～ト竹ノハゼル音が物凄イ。御代リノ生蕃ガ引出サレ、首ヲ差ノベルトスパツト斬ル。ピユツト
高く血ガ飛上ツテ落ちルノガ、燄々ト燃上ル火ノ光リニ映ジテ金魚ノ如ク、花火デモ見ル気デ喜ンデ居
ル。四人、五人ト続クト利刀ナラ刃ガ欠ケル。鈍刀ナラ曲ツテ仕舞フ。草鞋履キデ踏ミ伸バシ斬ルト、
今度ハ左ニ⁽⁷⁾曲リ右ニ曲リシテ折レテ仕舞フ。曹長ノ軍刃デハ刃モ立タヌ。二度三度モ斬ツテ投ゲ込ム。
百二、三十人斬ツタ時ニハ、穴ノ半分以上モ生蕃デ埋メラレタ。火ハ山ニ燃移リ、青イ木ノ燃エル威イ
ニ、パン～ト上ニ燃ル。竹藪ニ燃ヘ移リ、パン～ト生蕃ノ逆襲カト驚カセル。逃ゲタ生蕃ガ遠ク
ノ山ノ上カラ、吾子ノ殺サレルノヲ悲シミ嘆ク声ハ犬ノ遠吠ノ如ク聞ヘル。ア、ア、ト泣乍ラ、山ノ
上ヲ泣乍ラ歩ク姿ガ火ノ光デ見エル。

生蕃もいかに悲しく歎くらむ

吾子の死ぬを眼の前に見て

数多イ中ニハ、穴ノ中ニ投ゲ込マレタ生蕃ガノタウチ廻ツテヒヨツクリ起上リ、髪ヲオツサワラニシ
テ、血ダラケノ顔、耳マデ裂ケタ口ヲ開キ、恨メシゲニギヨロ～ニラミ廻ス。火ノ光リデ血ノ這入ツタ
眼ガ爛々ト光リマスカラ、身ノ毛モヨダツ程恐ロシイ。恐ロシ紛レニ剣突鉄鉦デ刺シ殺ス。軍刀デ斬ル
コトハ止メ、銃剣デ突殺スコトニナツタ。生蕃ノ両手ヲ以テ二人デ穴ノ前ニ引出シ、生蕃ノ後カラ、銃
剣術デ練ヘタ腕前ヘヲ現スハ此時也ト二人ノ兵ガエツヤツト突上ゲル。ヤツト引キ抜クト同時ニ穴ノ中
ニ落ちル。生蕃ハ死際ガ立派デアアル。殺サレル番ガ来ルト胸ヲ張り、トツツト～ト大股ニ歩イテ穴ノ
前ニ首ヲ出シ、亦ハ両手ヲ拵ゲテ潔良ク死ニマス。大人バカリデハナイ。女デモ子供デモ泣ク者ハ一人

モナイ。突キ損ジラレルト、アツト苦シ紛レニ泣クノハ有リマスガ、其他ニハ決シテ無カツタ。況ンヤ腰ヲ抜カシタ者ハ無イ。女ヤ子供ハ身ガ軽イ為、二人ノ兵隊ニ突キ上ゲラレテ仕舞フ。躰ガ銃剣デ突キ上ゲラレマス、生蕃ガアーント死ニ声ヲ上ゲ、銃剣ガガタ〜ト震ヘ響キ、何トモ言ヘヌ気味悪ルサデアル。

山ハ次第ニ遠ク熱ヘテ行ク。天ヲ^(集)慄セシ火モ段々下火トナリ、夜ハ深々ト更ケ渡リ、大和魂ニホマル勇士モ薄気味悪ク感ジラレル。高く〜遠ク狼ノ吼ユルガ如ク聞ユルノ逃ゲノビタ親ヤ子が首ヲ切ラルハ、母ヤ弟ノ死ヲ悲シム声デアル。底ク^(集)近ク虫ノ鳴ク如ク哀レニ聞ユルノハ、未ダ息絶エヌ生蕃ノウメク声デアル。百軒余リノ蕃屋ノ焼跡カラ青天ガヒラ〜ト燃上ル。針糸ヤ金ノ燃エルノガ鬼火ニ見エル。此ノ世乍ラノ地獄デアル。死人ニ酔ツタトモ言フノカ、ゲエ〜ト吐瀉スル声ガ初ツタ。大隊長ハ小高イ山ニ上リ、天皇陛下万歳〜、全軍声ヲ合せ、山モ碎ケヨトバカリニ万歳〜ト唱ヘルト共ニ、吐氣ノ者ハ胸ガスーツシテ癩ツタト中シマス。山井大尉ハ、加藤、怨親平等、生蕃横死者ノ為ニ御経ヲ上ゲテヤレ、ト言ハレレ御経ヲ読ンダガ、焼石ニ水ノ様ナ気ガシタガ段々泌ミテ濡ヒガ出テ来タカラ、涙乍ラニ生蕃横死者頓証菩提ト回向シタ。其次マヘヤン社ニテハ七十五名ノ生蕃ヲ穴ニ入レ、写真ヲ撮ル様ニ兵ガ段々ニ並ビ、一声射撃デ撃殺シ、霧社蕃討伐ヲ終ツテ凱旋シタ。

台湾ノ水牛ハ、七ツハツノ台湾入ノ子供デ十疋モ二十疋モ自由ニ連レテ遊牧シテ居ルガ、此ノ水牛、軍服ガ大嫌イ。領台当時、殺サレタ親ノ仇ノ生レ代リダト言フコトハ信ジラレヌガ、兵隊ヲ見ルト追馳ケル。将校ガ軍刃^(刀)デ飛付イタ水牛ニ斬リ付ケタガ、彼ノ厚イ堅イ二尺モアル二本ノ角デ打チ止メテ、将校ヲ角デ二、三間投ゲ上ゲ、落ちルトハ投ゲ上ゲ、子供ノ御手玉ノ様ニシテ遂ニ将校ヲ殺シテ仕舞ツタ。隊長ノ仇ト銃剣デ兵隊ガ包囲シタガ、荒レ廻ル荒牛デ近寄ルコトガ出来ヌ。其ノ時ジョウント言フ小サイ洋犬ガ、牛ニワン〜ト吠ヘ付イタ。水牛ハ此ノ小僧ヤカマシト問題ニセズ、兵隊ノ方バカリ見テ居ルト、ジョウガ突然、水牛ノ前足ニ噛ミ付イタカラ、水牛ガ怒ツテ角ヲフリ立テ犬ヲ追馳ケル。犬ハス早ク後足ニ喰付ク。水牛ガオノレト振向クト、犬ハ腹ノ下ヲ通ツテ、亦ワアーント言フナリ牛ノ尾ニ喰ヒ下ル。水牛ハクル〜廻^(り)ヒシテ倒レ、遂ニハ犬ニ惨々ノ目ニ遇ハサレテ殺サレタ。此ノ犬、必ズ演習ノ時ニハ御供シテ水牛除ケノ犬ダト言フテ、可愛ガラレテ居リマシタ。

大正三年ニハ、山井大尉ガ御退職ニナリ、井沢大尉ガ中隊長トシテ赴任サレ、私ハ引続キ従卒デアリマシタ。中隊長ノ家庭ハ御老母ト奥様ト二人ノ御嬢様、姉ハ五歳、妹ハ四歳、春子様ト秋子様デシタ。奥様ガ腹部ノ病氣デ台北病院^(入院)ニサレテカラハ、毎日御子サンノ相手デ、熱イ演習ノ代リニ涼シイ公園デ良ク遊ンダ。解^(開)腹子術スル為入院サレタ奥様ハ、二ケ月後手術ヲ終リ全快シテ帰ラレタ。特ニ忘レラレヌ事ハ、家庭人トシテ天井デモ、ウナ井デモ同ジニ取ツテ食卓ヲ共ニシ、優遇シテ下サレタ事デアル。其後、衛生隊トナリ、担架卒トシテ台北第二大隊ニ仮編入サレタ。仮編入ハズボラデ継子扱ヒサレル者デアルガ、私ハ真面目ニ良ク働イタ御陰デ、第一期検閲ノ時、将校ノ公評ノ時(台北ニ見学ニ来タ台中・台南ノ大隊長)全部ノ前ニテ、聯隊長第十一中隊長伊沢大尉衛生隊ノ加藤洞源ハ、良ク精勤ニ働キ軍務ニ忠実ニシテ模範兵デアル、第十一中隊ノ為ニ伝ヘテ置ク。「伊沢大尉ハ喜バレ、大隊長カラモ喜バレ、早速二本目ノ精勤章ヲ台中カラ贈与サレタ時ハ嬉シク思ツタ。馬鹿熱心ナ私ハ学科デハ何時モ一番ヲ貰フコトガ出来タ。生蕃語モ一番デアツタガ、實際トハ違イ基本デハ余リ通ジナカツタ。学問ト實際ハ少シ違フト、ツラ〜感ゼシメラレタ。

大正三年五月十七日出発、雨ニ打タレ風ニ暴サレ、山亦山ヲ越エ、五月廿七日ニハ海拔一万一千尺ノ□菜主山ニ宮レ野天幕ノ生活ヲシタ。高山ノ空気稀薄ノ為手足ハフクレ、赤痢ノ如キ症状ニナツタガ、サクサンヲ薄メデ飲ンダラ間モ無ク癒ツタ。山ハ一面ノ石楠木ノ花盛り、岩石峨々トシテ聳ユル絶壁ニ、赤・白・薄紫ノ石楠ノ花、幾万本ト知ラヌ数ニテ色取り〜ニ咲揃ヒ、美ヲ競ヒ、処々ニ奇岩ヲ交ヘテ^(母)絵モ言ハレヌ風景。無風流ナル軍人モ、アツ奇麗ダ、素敵ダ、絶景〜、之ガ本当ノ極楽ダ、石楠木ノ海ダ、〜ト喜ビ愛シタ。此ノ景ノミヲ愛スル風流人デハナイ。明日ハ五発ノ実弾ヲ込メ剣突鉄砲カツイテ敵ヲ追ハネバナラス。五月ノ台湾トハ言ヘ、高山ハ氷ガ張り、雨ニ濡レテハ凍死スル様デアル。カンコーナチヤツプンナ、〜、ト道傍ニ倒レテ居ル人夫(苦力)ハ、躰ヲ震ワセ乍ラ凍死スルノヲ幾人モ見タ。□菜主山ヲ出発シ、闇イ木ノ下道ヲ歩イテ三日目、大隊長ガ、生蕃ノ家ガ見え出シタ、昼食ヲシテ仕舞ヘ。皆焼米ヲ頬張ツテ居ルト、スサマシイ音ヲ立テ、凡ソ二百名程ノ生蕃ガ一度ニドツト現レタカラ、皆驚イテ俯セノ姿勢デ構ヘテ居リマス。大隊長ハ通訳ヲシテ降参セヨト申込マセマスト、通訳ガ甘ク説キ伏セテ降参サセ、蕃社ノ上ニ案内セヨト申込ミマスト、従順ニ案内シタ場所ニ天幕ヲ張り露営ノ準備ヲシタ。所ガ夕方ニナルト、生蕃ハ夜襲シテ三名ノ首ヲ取ツテ逃ゲ仕舞フ。生蕃ニ袋ノ鼠ニサレテ仕舞ツタノデアリマス。毎日三、四人ヅ、軍人ハ討タレルガ、生蕃^(ハ)ヲ姿モ見セナイ。馬ノ背ノ様ナ処ニ五百人モ集マツタカラ、平ラナ処バカリト言フ訳ニハ行カヌ。山ノ上カラ天幕ヲ風呂敷下ゲタ様ニ下ゲ、其ノ下ニ腰掛ケル丈ケツ、ノ穴ヲ堀リ、羅漢様ノ様ニシテ雨ヲ凌キ夜ヲ明カス、疲労シテ居リマスカラ、座ツテ眠テ居ル中ニ一人下ニ眠リ落チルト、ゴロ〜ト五、六人一処ニ雪崩レ落チ、ア、痛イ〜、ト言フタナリ其儘正躰モナク眠テ仕舞フ。

夜ガ明ケルト、四方カラ生蕃ガ狙撃スル為ニ何スル事モ出来ヌ。水ハナシ糧食モナイ。大隊長ハ何日糧食ガ来ルカ分ラヌカラ、米ヲ大切ニセネバナラヌト言ハレ、危険デ焼米モ出来ナイカラ、米生米ヲ一粒ツ、口ニ頬張ツテ命ヲ継グノデアリマスガ、其時ノ生米ノ甘美サト言フ者ハ今モ忘レラレヌ。遂ニ七日間絶食同様ニナリ、天幕ノ上ヲ流ル、雨ヲ下カラ吸ヒ、咽ヲシメスバカリデスカラ、咽ガカワイテ〜ヒモジクテ〜ナラヌト皆言フテ居ル時、私ハ郷里ニ帰り母ニ御馳走シテ貰ヒ御茶ヲ腹一杯服ンダ夢ヲ見タ。夢ハ醒タガ、腹ハ満腹シ咽^(喉)侯モカワカズ飢餓ノ苦シミカラ免レマシタ。機関銃山砲隊ガ来テ掩護射撃スル下ヲ、機関銃隊長佐藤少尉ガ蕃社ノ焼ヒヲシタ為、生蕃ハ川向フニ逃ゲテ、一周間ノ鬱憤晴ラシニ、生蕃ノ豚ヲ殺シ輪切りニシ、鶏ヲ捕エテ、万歳〜ト凱歌ヲ揚ゲ、前進シテ敵襲サレナイ位置ニ陣地ヲ造ル。昨日迄ノ病入カ死人ノ様ナ顔ガ希望ニ輝キ、アナ嬉レシ、喜バシ、戦勝チヌノ声ハ四方ニ聞ヘル。大高中尉ハ将校斥候トナリ、百五十名ノ部下ヲ引率シテ敵ヲ追撃シタ。

私ノ部隊デハ、残ツタ者ハ人夫ヲ連レテ川ニ洗濯ニ行キ、米ヲカシニ行ク事ニナツテ居ル。之ガ頗ル危険ノ投。生蕃ハ必ズ此処ヲ狙撃スルカラ何時モ皆逃ゲタガル。私ハ将校斥候ニ付イテ行ケト命ゼラレタカラ仕度スルト、留守番ノ松永君ガ、加藤サン、代ツテ下サラヌカ、僕、川ニ行クノ気味ガ悪イカラ代ツテ下サイ。軍医^(軍)松永、意ク地ナシダナ。隊長加藤、代ツテヤレ。洞ハイ。久シ振りデアル洗濯ハ沢山アル。食事ノ仕度ハアル。各部隊カラ洗濯ヤ飯^(食)ガウヲ以テ出掛ケル。山砲ハドカーン〜ト砲撃スル。機関銃ハパンバンパンパパパパト、絶間ナル撃出サレル。一人ノ生蕃ガ射タレタノニ、機関銃ノ弾ガ五、六十モ命中シテ居ルノヲ見テ、生蕃ハ神様ノ鉄砲〜ト畏レタト申シマス。午前九時頃、将校斥候ト生蕃ハ、ダーン、パン〜、ポン〜ト戦争ガ初マツタノデス。将校斥候ト衝突シテ居ルカラ、今ノ中ニ川ニ

行ケ、ト命令ニ出タカラ、五人ノ人夫ヲツレ洗濯物ト飯合ヲ以テ川ニ行キ、久シブリニ顔ヲ洗イ、洗濯物ヲザパ〜トザツト洗イ、米ヲカシテ、ヒョイト見ルトアブガ真直グ限ノ前ヲ飛ンダ。亦一疋ビューン、オヤツト見ルト、アブノ飛ンダ方ノ^(背)芳ガボキボキト折レル。見ルト川向フニ二、三人ノ人影が見エル。洞敵襲、ト言フナリ、洗濯物ト飯合ヲ以テ^(持)逃出シタ。洗濯最中ノ人ハ其儘川ニ^(背)於いて逃出ス。ダアーン〜ハ、生蕃ノダム〜弾ダカラ直グ分ルガ、上ノ将校ノ方ダト油断シタカラ耐ラナイ。痛イ、ウーム、ト人夫ノ苦シム声ヲ見聞キ乍ラ、無鉄砲ダカラ逃ゲルヨリ他ハナイ。逃ゲルニモ上リ坂ダカラ、マルデ夢デ追馳ケラレタ時ノ様ニ一寸モ足ハ前ニ出ナイ。五、六間、^(背)アアーン〜ト聞乍ラ上ツタガ、トテモ苦シクテ上レナイ。生蕃式ニ草ヲモグツテ逃ゲヨウト振返ル拍手ニ、^(背)アアーント言フタト同時ニ倒レテ仕舞フ。ヤラレタナト思乍ラモ、這イズツテ命カラ〜逃ゲ帰ツテ報告シタ。敵ヲ見タ時、南無三宝仕舞ツタト思ツタガ、南無観世音、〜、〜、〜、〜ト一心不乱ニ念ジタ御利益ニヤ、アアーン、ト音シテ倒レタノハ、飯合ニ弾ガ当リ、洗濯物ヲ持ツテ居タ為ニ助カツタ。将校斥候長大高中尉ハ両手ヲ撃チ折ラレ、頬ヲ撃抜カレ口ガ胸ニ下リ、阿呆ニナツテ仕舞、兵卒三十名、人夫八名ノ死者ヲ出シテ引上ゲテ参リマシタ時、松永君モ戦死者トナツテ居リマシタ。私ハ今モ身代リ松永君ト菩提ヲ吊ツテ居リマス。

兵士ハ百七十発ヅノ実弾ヲ撃尽シ、只死ヲ待ツバカリ、其ノ心細サト言フ物ハ無イ。生蕃ニネラワレ、モウ絶対絶命助カラナイガ、助カリタイト一生懸命御守様ヲ頼ンダト云。無事ニ帰ツタ者ハ、木ノ枝ニ御り袋ヲカケ、一心不乱ニ御礼ヲ申シテ居リマシタ。此地ハ、バトラン蕃ト云生蕃第一ノ強蕃デアル。戦術ガ上手デ^(脚)馳引モウマイ。花蓮港ヨリ来ル警察隊ニ帰順シテ、一名モ罪ヲ出サナカツタ。陸軍部隊ノ残念サハ言フ迄モナイ。

海拔一万二千尺タロコ太山ヲ越エ、日月ヲ重ネ、ラビット合流点ニ露營シマシタ時ハ、川端デアツタ為水ニハ楽ヲシマシタガ、聞モナク苦シメラレマシタ。大正三年七月七日、折カラノ暴風雨、大暴風雨。天幕ハ倒サル、山水ハドン〜荷物ヲ流ス。間誤〜スル間ニ高イ山ヲ四方ニ持ツテ居ルカラ水ハ見ル〜増ス。大水ダ、〜、上ニ逃ゲヨ、上ニ逃ゲヨ、ト言フ声ニ戦時気分デ引越シテ、ヤレ〜ト安心シテ居ルト、大雨デ山崩レガ出来、上カラ石ガコロ〜、大キイ石カラ石ニ衝突シ、四斗樽ノ様ナ石ガゴロ〜落チテ呉ル。アブナアイ、ノ〜、山ノ上カラ石ガ落ちル。金剛山ノ石落シダ、ト遠クノ方デハ嬉ンデ見テ居ルガ、下ニ引越シタ者ハ、命カラ〜逃出シタ。危険ノ場所ト言フノデ饅頭山ニ引越シタ。此処ニ引越シテカラ、私ハ岩ノ上ニ座禅シテ居タ。戦争ノ無イ時ハ、尺ハヲ吹イタリ角力ヲ取ツタリ、演芸大会デ芝居モ浪花節モ落語モ講演モ時々アルカラ、座禅スル暇ハ十分有ル。座禅シ乍ラ、同郷カラ七人出テ五人戦死シタ不運ノ人々ノ為ニ御経ヲ読ミ、生死巖頭ニ立ツ自分。敵バカリデナイ、災難ガアル。トテモ無事ニハ帰レヌ。ドーセ死ヌナラ、座禅シタ処ヲ撃タレテ死ニタイー座禅シテ居ル。毎日座ツテ居ル。

七月十七日朝、座禅シテ前ノ山ノニアル滝ヲ眺メテ居ル。此ノ滝ハ無名滝デ二十丈ノ長サ。雨が降ルト三十丈ノ長サニ落ちル滝デアル。向フ側ノ山ハ、多ク大理石ノ如キ岩ニシテ、トゞ松ガ二間位ノ白髯ノ如キ苔ヲ付ケ、松・擲燭等ガ岩ノ間ニ茂ツテ蓬萊山ノ如キ感じガスル。夕ハ夕モヤガカ、朝ハ山ノ中腹ニ朝靄ガ^(脚)手引キ、実ニ滝ニ一段ノ風流ヲ増ス。十八日ノ朝座禅シテ居リ、前ニ手引ク雲ヲ見テ居ルト、滝ノ前ニ観音様ガ立ツテ見エル。手ヲ合セテ拝ンダ時ニハ、滝ノ飛沫ガシテモウ見エナカツタガ、噫、有難イ、〜、ト心ノ底ノ底ニ御姿ヲ刻ミ、南無観世音菩薩、〜、〜ト心静カニ観音経ヲ誦ンデカラ静カニ立チ、私ハ観音様ヲ拝ンダカラ死ナナイ。私ハ観音様ガ守ツテ下サルト皆ニ話シ、ソレカラ埋レ

木ヲ拾ツテハ、観音様ノ御姿ヲ彫刻シ、有難ガル人ニ呈上シタ。下手ナガラモ習ツタ観音様モ両イテ、皆様ニ貰ツテ頂イタ。私ハ観音様ガ助ケテ下サル。私ヲ助ケテ下サルカラ、私モ御礼ニ観音様ノ御姿ヲ壺万躰拝写シ、此ノ有難イ気持報恩感謝ノ微意ヲ表シタイ、命サヘ有レバー万躰ノ観音様ヲ拝写シ、御礼スルト共ニ拜ム。多勢ノ方ガ私同様観音様ノ御利益ヲ受ケ、信仰ヲ養イ、進ンデハ活キタ観音様ニナツテ頂キタイト、甘党ニ緑ノ深イ饅頭山デ此ノ誓願ヲ起スモ、饅頭ヘノ報恩カト思イマス。

(後略)

注

- 1 大江志乃夫「植民地戦争と総督府の成立」『岩波講座近代日本と植民地 2』岩波書店、1992年、3～11頁。また靖国神社は「戦役事変別合祀祭神数」として、日清戦争（13,619柱）とは別に、「台湾征討」（1,130柱）のデータを公表している。
- 2 近年の写真資料集として、高金素梅編『無言の幽谷』（正中書房、2002年）がある。また石丸雅邦「戦後における日本統治時代の「理蕃政策」関連文献をふりかえって 日本と台湾の比較」台湾原住民研究シンポジウム実行委員会編『台湾原住民研究 日本と台湾における回顧と展望』風響社、2006年に収められている文献目録はきわめて有益である。
- 3 神奈川県綾瀬市編『綾瀬市史 3 資料編近代』1995年、359頁。
- 4 加藤良興氏とのインタビュー、2006年5月31日、於報恩寺。
- 5 『綾瀬市史 4 資料編現代』2000年の「付属資料」として収録されている「加藤洞源自伝草稿と齊藤定八日記」参照。
- 6 後藤乾一『近代日本と東南アジア』岩波書店、1995年、5頁。
- 7 真栄平房昭「人類館事件—近代日本の民族問題と沖縄—」『国際交流』No 63, 1994年所収。また大田昌秀『新版 醜い日本人—日本の沖縄意識—』岩波現代文庫、2000年、35～37頁。
- 8 傅琪貽「台湾原住民族における植民地化と脱植民地化」『岩波講座アジア太平洋戦争 4』岩波書店、2006年、268頁。
- 9 近藤正己「台湾総督府の「理蕃」体制と霧社事件」『岩波講座近代日本と植民地 2』岩波書店、1992年、36頁。また近藤の『総力戦と台湾 日本植民地崩壊の研究』刀水書房、1996年、第4章「先住民に対する「皇民化」政策」も参照。
- 10 大江志乃夫、前掲論文、4～7頁。
- 11 傅琪貽、前掲論文、21頁。
- 12 台湾総督府警察局編『台湾の警察』1932年、264頁。また「理蕃事業」の延長線上で実施された原住民の集団移住政策とそれが原住民社会に及ぼした深刻な影響については、以下の論文が示唆的である。近藤綾「日本植民地期の台湾原住民に対する集団移住政策と「マラリア流行事件」」早稲田大学大学院アジア太平洋研究科修士論文、2004年。
- 13 近藤正己、前掲論文、37頁。この間の日本側出征総数は、警察隊を主に8000人（陸軍を加えると1万人）、出費は1600万円といわれている。中村孝志「日本の“高砂族”統治」毎日新聞社編『日本植民地史 3 台湾』1978年、38頁。
- 14 又吉盛清『日本植民地下の台湾と沖縄』沖縄あさ書房、1990年、154～5頁。
- 15 台湾経世新報社編『台湾大年表』1938年に依拠。
- 16 佐久間総督の送別会が開かれてから一週間後の1915年5月17日、『台湾大年表』には記載がないが、花蓮県卓溪郷の「大分地区」（ブヌン語バングダヴァン）でブヌンによる激しい抗日運動が発生した。警察官12名が死亡したこの大分事件についての最新の研究として次の論文がある。余明德「大分事件ブヌン・ダホ＝アリ（Dahu Ali）首謀説の真相」台湾原住民研究シンポジウム実行委員会編『台湾原住民研究 日本と台湾における回顧と展望』風響社、146～163頁。

(後記) 本史料の復刻に当たっては、原資料の所有者、神奈川県綾瀬市寺尾の報恩寺住職加藤良興氏、ならびに綾瀬市秘書課市史編集係から暖かいご配慮を頂いた。また本史料の存在をご教示くださった大畑哲氏にも深甚の謝意を表したい。